

支部ニュース「AH!」の29号をお届けいたします。

## 長野支所便り

### 「あたらしい生活様式の発生 棒のような、棒でないような」

今年去年貫く棒の如きもの、という句を聞いたことがある。棒は、細長いものの総称だが、手でもつことができるように人工的に加工されたもの指す（大槻文彦：大言海）。杖や天秤棒や武器にもなり、比喩的に、単調で変化にとぼしいことをいう。時間についての棒の比喩としては、こっちの方が古い。

山に居れば斯くまでも今に遠いものであろうか。思ふに古今は直立する一の棒ではなくて。山地に向けて之を横に寝かしたやうなのが我国のさまである。（柳田國男：後狩詞記）

昭和25年の高浜虚子の句は、時間の連続性を再認識させ、人為的な画期とそこにおける儀礼の無根拠性を暴露した、一種の形式主義批判かと思う。明治42年の柳田國男の感慨からは、もはや 棒 としては表現し得ない明治日本の不均質さ、異質な時空間の併存を読み取ることができる。

これらの比喩にみられるように、文化の進化や伝播は考えられやすい。たとえば、建築史の講義では、個々の事例の羅列と暗記にならないよう、画期をなす著名な様式や形態と、それに前後する過渡的な事例を合わせて紹介することで、棒 のように連なってゆく住居の系譜を再現するようところがけている。もちろん、完全な 棒 にはほどとおく、まだまだ謎はおおい。

一方、文化の多発性（原広司：集落への旅）や文化の遷移（一定の条件のもとでは、共同体の生活様式の発展が、一定の法則に従って進行する；梅棹忠夫：文明の生態史観）といった独立的発明・並行的進化は、その確認がむずかしい。先日、独立的発明・並行的進化かも知れない場面に遭遇した。

図書館にいくときは適当な紙袋を使う。この発明、複数の本でも持ちやすいとか小雨でも濡らさずに済むとかいう、かばん一般の特徴はもちろんのこと、どおせ紙袋だからというので、手荷物ロッカーにしまわずに、ロッカーのうえかなんかにうちやっておいてもかまわない、という利点がある。帰りにはまたロッカーのうえへ手を伸ばせばよい。万一紛失してもしよせん購買でもらった紙袋。と満足げに図書館に向かうと、きょう、わたしの発明とまったく同じようにして、おいてあった紙袋を持ち帰るおじいさんを見かけた。それはまるで、手荷物持ち込み禁止と書物の持ち運びという一定の条件下で、あたらしい生活様式が独立的に発明されたようだ。とはいえ、わたしの発明がおじいさんに伝播したのではない、ということは本人に聞かないかぎりたしかめられないし、ふつう、そんなことはしない。

信州大学 早見洋平

## 石川支所便り

### 「金沢の都心空間」

最近、都市計画の分野ではコンパクトシティ論が盛り上がっている。持続可能な都市システムへの転換・歩いて暮らせる町づくりを目標に、郊外開発はできる限り抑制し、公共交通網の再編と都心居住等を促進する諸施策を通じて、空洞化が著しい都心部に都市的集積を呼び戻すための方策が議論されている。しかし、都心をどのような生活空間として再生すべきか、という都市デザイン視点からの議論は案外少ない。

個人的な話であるが、14年間暮らした東京を離れ、この春から金沢暮らしを始めることになった。北陸の生活は初めてだが、食材は美味で豊富、自然

は豊か、気候も許容範囲内のため直に好きになった。自動車生活にも案外早く慣れることができた。説明するまでもないが加賀百万石の残した歴史的環境も見事である。先日、ゼミ学生を連れて金沢城趾北側に位置する尾張町界隈を散策した。尾張町の裏手は旧北国街道が貫通する。西には市民の台所である近江町市場が、東には昔ながらの茶屋町である主計町がある。浅野川を渡ると観光スポットで有名な東茶屋町まで歩くことができる。しかしながら、周辺に比べて尾張町そのものは、商業の空洞化が深刻、かつ、都心居住用のマンションが乱立し、地区としての性格が曖昧になっている。その結果として

空間の魅力に欠ける。金沢全体がコンパクトシティを目指して再生・再活性化していく中で、尾張町の都市空間はどのように再生すれば良いのだろうか。個人的には二つのポイントがあると考える。第一に、歴史的に構築された都市構造を顕在化させること。歩いて生活していた昔の都市はコンパクトであったはずだ。金沢の都心は、城下町時代の都市構造が今も生きている。グリッド型街路ではなく、折れ曲がった街路には、郊外開発にはない心地よいスケール感が残っている。ここから限界空間を再構築できないか。第二に、断片化した都市空間をつなぐこと。これには二つの視点がある。第一に、尾張町からは金沢城の雰囲気あまり感じられない。金沢城趾と浅野川に挟まれた立地が都市空間の魅力として生かされるべきだ。第二に、老舗料亭の活用。

尾張町は北国街道沿いに形成したストリート型の商業地であったが、現在はストリートによって特徴付けられるとは言い難い。しかしながら、地区内ならどこにいても2～3分歩けば、何れかの老舗料亭にたどり着く。老舗料亭に注目して都市空間を再組織化できないだろうか。尾張町の都市空間が魅力的に再生すれば、片町・香林坊・金沢城趾から主計町・東茶屋町までの観光集客スポットが魅力的な境界によって大きくつながることになる。このエリアの動向に今後とも注目していこうと思っている。

金沢工業大学 環境・建築学部  
都市デザイン学科  
遠藤新

## 福井支所便り

### 「私の目指すもの」

私は大学院中退である。実は私が大学院一年の時、周囲に内緒で公務員試験を受験し、勢いで合格してしまったのだ。現在、私は生まれ故郷の市役所で建築技師として働かせていただいている。

もちろん私は、就職までの腰掛のつもりで大学院に進学したわけではない。私の在籍していたゼミの先生は非常に研究熱心な方で、その先生のもとで二年間じっくり勉強するつもりであった。しかし、地元市役所で約十年ぶりに建築技師の採用があると聞き、受験を決意したのである。

学生時代、私はまちづくりという言葉に憧れていた。そして、まちづくりに直接関わるには、技術系の公務員になるのが一番だと思っていた。都市をデザインし、道路や建物を造るのは技術・屋の仕事だと思っていたのだ。だから建築技師の採用があるこの年を逃してはいけないという単純な思いであった。

だが研究を途中で投げ出し、大学院を辞めると言ったら先生は何と言うだろうか…。そして予想通り先生は反対された。だが、反対の理由は全く予想外のものだった。『行政を実質的に動かしているのは事務職。技術・屋は事務職が決めたルールの上を走るだけのことが往々にしてある。あなたが本当に行政でまちづくりをしたいのなら、技師ではなく事務職で受け直した方がよいのではないか。』

私は先生のこの言葉の意味が理解できなかった。そして生意気にも『私は事務職に使われるような技師にはならない』と反論したのを覚えている。

最終的に先生は私の意志を尊重し送り出してくれた。それから約3年経つが、今でもふと、大学院を中退すると決めたときの先生とのやりとりを思い出すことがある。そして実際に行政の中で働いてゆくなかで、先生のおっしゃった言葉の意味が少しずつ分かってきた。技師は確かにスペシャリストではあるが、異動する部署が限られているため視野が狭くなりがちである。故にゼネラリストである事務職から時に技術・屋として便利に使われるような立場にもなりかねない。

あの時、先生は私に『単なる技術・屋ではなく、事務職に対等に渡り合えるような知識と見識をもった技師になれるよう努力しなさい』と伝えたかったのではないだろうか。

今の私は技術・屋以前の半人前、ヒヨッコ同然である。だが一日も早く専門以外の幅広い視野を持った一人前の技師(エンジニア)になり、故郷のまちづくりに貢献したいと思う。

越前市役所 石本雄祐

## 富山支所便り

### 「杉ムク材が架構材として使用できる「立山フレーム」開発」

浴槽の中で腱鞘炎にかかった指をマッサージしていたその時、ひょんな思いつきから生まれたのがこのフレーム構造です。更に練り上げ、富山生まれの雪に耐える木質屋根フレーム(立山フレーム)とし、富山大学教授秦先生の指導をいただき、プロジェクトを組み開発したものです。フレームの部材は主材・2本の側材(主材を挟む)・枕材(主材方向に直角)から構成され、アーチ形状に編込むように組みます。(写真を参照)金物としては、主材と2本の側材が交差する接合部分にボルト・ドリフトピンを使う程度です。設定荷重を瓦屋根・積雪1.5mとして、構造解析をしたところ杉材でもOKとなり、富山県林業技術センター木材試験場にて県産材無等級の杉ムク材を使用して接合部の破壊試験を繰り返し、割裂破壊に対応した接合方法を検討。最終的に部材寸法は主材:120×150・側材:2-75×150、試験方法はアムスラー型試験機2点集中荷重で、スパン

4間の実大破壊試験までを行いました。結果概要は終局強度を上回り、中長期荷重時のスパン中央部の変位はスパンの1/970程度あり、最終破壊は荷重点での曲げ破壊でしたが脆性破壊が発生せず粘り強い立山フレームといえます。中規模程度の広いスペースを必要とする施設が杉材で建てることができ、県産材の普及に貢献できそうな木造工法です。立山フレームを使った公共施設第一号が立山町吉峰に平成18年に完成予定です。



写真 架構裁荷試験の様子

JIA 富山地域会員 在原誠人

## 新潟支所便り

### 「災害仮設住宅地でのオープンカフェの試み」

週末の午後、仮設住宅地のただっ広い駐車場に突如白いテントのオープンカフェが出現... .今秋の週末毎に7.13水害、中越地震の災害仮設住宅でオープンカフェを催した。このプロジェクトの目的は、不自由な生活を強いられている方々にささやかな娯楽を提供することであるが、仮設住宅生活の本音を知りたいという狙いもあった。アンケートやインタビュー調査ではなく、コーヒーでも飲んでもらいながらのざっくばらんな無駄話にこそ、彼らの生活の実感が含まれているのではないかと。型通りの質問項目を準備することをやめ、カフェではひたすら会話を楽しむようにした。こうした会話の中から浮かび上がってきたのは、居住者の強い「絆」と「しがらみ」である。阪神淡路大震災の教訓から採用された、集落毎にまとまって仮設住宅地に入居するという配置は、近隣ごとで助け合い、一緒に集落に戻ろうという絆を強くしていた。しかし一方で、強いつながりで狭い仮設住宅地に住むことの息苦しさもある。しがらみから一時解放される場所やコミュニケーションのチャンネルを提供することの重要性を強く感じた。

もう一つのカフェの目的は仮設住宅の住みこなしノウハウの流通である。簡単な改造で仮設住宅を快適に住みこなす知恵は地域に偏在している。40以上の仮設住宅地の調査をしたが、様々に工夫している住宅地もあれば、現状回復にこだわり全く手をつけていない住宅地もある。仮設住宅の入居期間は2年間。仮の住まいとはいえ被災から再建へ向かう重要な環境である。少しでもより良く住みこなすノウハウがあるのならそれを伝えたい。そこでカフェでは仮設住宅地で採取した住みこなし事例を展示し、その流通を試みると共にその場で得た新しい知見を展示に加えていき、居住者と一緒に仮設改造カタログを作る試みをした。

何故か週末毎に雨が降り、カフェは天候との闘いになったが、心温まる交流もあり、手応えのある週末となった。仮設住宅が2度目の冬を迎えようとしている今、今後何が出来るか、手探りの日々は続く。

新潟大学 工学部 建設学科  
岩佐明彦

## 「環境空気中のスギ花粉粒子」

我が国のスギ花粉症患者は1970年代より目立ち始め、最近さらに増加傾向にある。現在日本人の約16%がスギ花粉症といわれ、社会的に大きな関心事となっている。原因物質であるスギ花粉(図1)は直径約30 $\mu$ のほぼ球形の粒子で、突出した1個の発芽口があり、その先端がカギ状に曲がっているのが特徴である。発生源はスギの孤立木やスギ林である。スギ雄花の開花には気温の上昇が影響し、大きなスギ林で雄花が一斉に開花・飛散する際には「花粉雲」と呼ばれる状態が出現する(図2)。また、その輸送のされ方はそのときの気象条件(風向・風速など)により変化する。

近年、環境省より「環境省花粉観測システム(愛称:はなこさん)」の構築が開始され、スギ花粉の飛散情報が提供されるようになった。花粉飛散状況は各地点に配置された花粉自動測定器により計測され、1時間平均の花粉数(個/m<sup>3</sup>)が空中濃度として示されている。これは飛散シーズン中、24時間の連続稼働であり、観測データはホームページ上から簡単に手に入れることができる。そして花粉症患者への外出時花粉曝露の危険回避など、予防対策上の情報として活用が可能である。

現在、福井県には3箇所の観測点がもうけられ、今春は17年1月17日から5月31日までこの花粉自動計測器による測定が行われ、結果がホームページで公開されてきた。

この自動測定器には、スギ花粉に似たサイズの粒子であれば全てカウントしてしまうという問題点がある。

スギ花粉に似たヒノキ花粉や雪の粒子をもカウントするといわれ、必ずしもスギ花粉数のみのデータとは言えない部分もあるが、1日1回・スライドグラス上に落下した花粉を顕微鏡下で目視計数するという従来の測定法に費やされる労力に比べればはるかに容易に、しかも花粉の飛散状況がリアルタイムで把握出来るという利点がある。

建築の分野としてスギ花粉による環境空気の汚染問題を考える場合、野外よりもむしろ室内側が問題になるであろう。室内空気中に存在するスギ花粉はアレルゲンを保有する粒子として捉えられ、室内空気汚染物質として取り扱われる。この「花粉観測システム:はなこさん」によりもたらされるデータは、室内侵入の汚染源としての野外花粉量の1時間毎の詳細データである。測定日により異なる時刻的変動(例えば、日中に高濃度を示す場合、日中よりも早朝や夕方に高濃度を示す場合など)を知ることは室内濃度への影響を考える上で重要な情報源となる。

室内環境におけるスギ花粉量は野外と比較すればはるかに少ないが、アレルギー症状を引き起こす花粉量は人により異なっており、少ない花粉量でも発症する可能性があることを考えれば、建築学的にも防止対策が必要と思われる。

現在、室内における花粉測定のデータは野外に比べて測定例が少ない。今後、室内環境における花粉量に関するデータの収集から、室内汚染の発生機序を明らかにし、防止に向けた対策を考えていかなければならない。

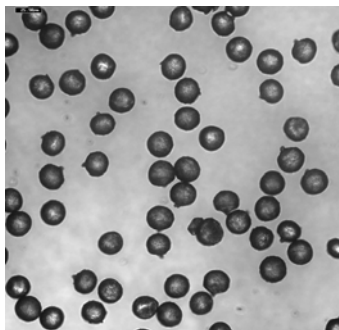


図1. スギ花粉



図2. 花粉の発生(福井県美山町)

## 学生特集

### 「建築の基」

新潟には去年からJIAユースという組織が結成され活動をしています。この組織というのは新潟の四大学、建築学を学ぶ学生を集め、将来の新潟建築を活性化させようという目的からできました。JIAユースでは新潟県の大学から集めた卒業設計を学生たちからの視点で優秀作品を決めます。このことで、他大学の学生たちとの意見交換をしています。今年は昨年起こった中越震災の被害の出た中となった山古志村の現状をユースメンバーで見に行きました。私が最初に見たときには「はっきり言ってどうしようも無い」の一言が頭を横切りました。自然の起こす力はなんとも壮大な力を秘め、何もかも飲み込んでいました。ですが、崩れた土砂や倒れかけている建物には、崩れたことによってまた新しい空間ができていくことにも気づきました。人間が手を加

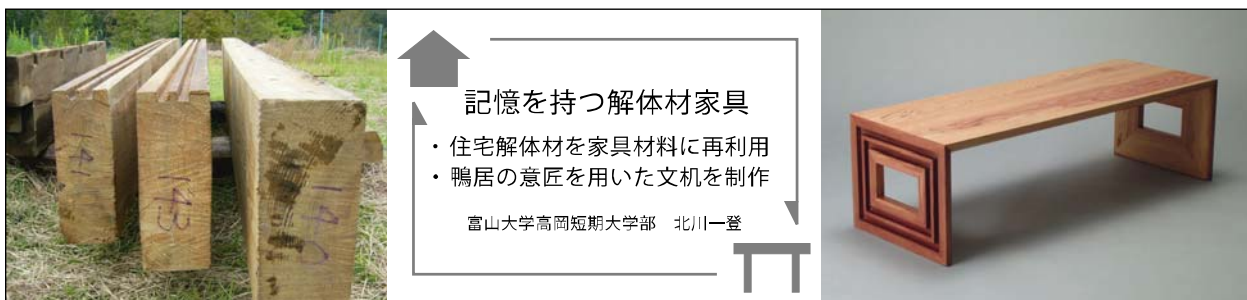
えてできた建物が自然の力も加わったことによって、また新しい可能性を教えていたようにも見えたのです。山古志の活動を通して最初に敷地計画(建てる場所・地盤調査)が建築ではいかに大切か感じました。

また、新潟工科大学では学内外住宅コンペを年に数回行っています。まず学内で行うことによって、学外の建築コンペに向ける姿勢ができます。さらに、学外からも作品が集まることによって競い合う楽しさから、個々の建築に対する向上心を高める事ができます。私も学内コンペでは入賞したことがあります。何のコンペでも入賞したりすると自分の考えが認められているようでうれしいものでした。これによって、自分の中で次に向けてのやる気ができました。何をやるにも、結局やる気ですよ。



新潟工科大学工学部建築学科4年  
竹節 俊介

### 「記憶を持つ解体材家具」



富山大学高岡短期大学部 北川一登

# いきいき街づくり

## 「能登 七尾の芝居小屋再生運動・でか小屋再生に向けて」

七尾市に残る明治期の芝居小屋「でか小屋」の保存・再生・活用をしていく活動があります。昨年8月に市民有志で「でか小屋再生おせっ会」というNPOを立ち上げ、私も設立時からこの団体の世話人をつとめています。

芝居小屋はかつては全国に二千館以上もあったといわれていますが、現存するものは二十数館を数えるほどになりました。「でか小屋」は、明治中期以前に建造された芝居小屋で、現存するものとしては日本海側では唯一の芝居小屋です。

「でか小屋」は、明治26年に芝居公演が行われたのを最後に、これまで倉庫や作業場として使われてきた小屋で、現在は個人の方の所有ですが、これを中心市街地の賑わい創出のシンボルとして活用したいと考えています。

会としては、芝居小屋の痕跡を調べる建物調査や当時の芝居をめぐる歴史の文献調査、再生に向けた「1円募金」などをこれまで行ってきました。

5月には、日本大学生産工学部建築工学科居住生活デザインコースの中村好文先生、曾根陽子先生とともにコース生30名の皆さんが、でか小屋の実測調査に来られ、7月には授業の課題の一環として、この小屋の再生プランについての提案を5つのプランにまとめていただき、発表会も行われました。市

民のでか小屋再生への共感の輪をより一層広げることにより一役買っていただきました。

10月には、小屋内に仮設の舞台や花道もつくって、市民有志が役者に扮して歌舞伎公演「七尾浦沖津白浪」も行いました。地元の商店街の若旦那やストリートミュージシャンが役者に扮し、裏方では大工さんから芝居好きの方まで、さまざまな方が「でか小屋再生」という共通の目的のもとに「おせっ会」として気持ちをひとつに集まりました。

今後は、現代のシーンの中で、芝居やコンサートに、また練習場として「使える」小屋として再生をしたい、単なる小屋という建築物＝ハードとしての再生だけでなく、運営やソフトの部分も含めた計画をまとめているところです。

そう、市民活動やボランティアといった高尚な(?)言葉ではなく、本当はみんな大いなる「おせっかい」なんですよ。そんな「おせっかい」が響きあう七尾のまちにしたい、と意気込んでいます。

(株)七尾街づくりセンター  
元気なお仕事塾 塾長  
内山博史

### \* \* 支部からのお知らせ \* \*

あなたの建築・設計作品の、ユニークなアイデアを紹介しませんか？  
今年の支部大会では、建築・設計作品も発表できることになりました。ご希望の方は、まもなく発表される執筆要領にしたがって、ご応募ください。

本年度の

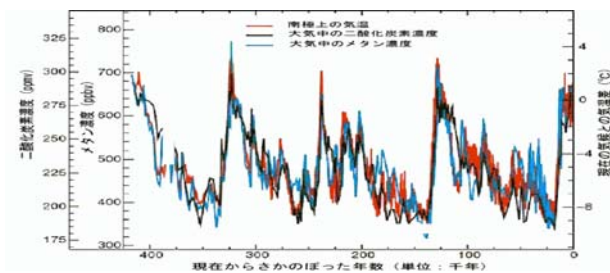
・総会は、5月20日(長野) ・支部大会は、7月8, 9日(福井)にて  
皆様ふるってご参加ください。

2006年は日本建築学会創設120周年です。本部ばかりでなく、各支部でも様々なイベントを企画しています。講演会・見学会・設計競技等も予定しています。後日発表されます案内でご確認ください。

# シリーズ 隠れた建築

## 「無関心が招く地球破壊」

京都議定書の科学的根拠となっている IPCC 第三次評価報告書によると、「大気中の二酸化炭素(CO2)濃度は、1750年以降31%増加した。過去42万年間で現在のCO2濃度を超えたことはなく、過去2000万年間でも超えなかった可能性が高い。」とあります。(下図)



引用：20世紀の日本の気候（気象庁2002）

また、今年5月の中央環境審議会の報告によると、地球規模での悪影響を未然防止するためには気温を2度以下、大気中濃度を475ppm以下に抑える必要があるという。そしてこれを達成するためには、日本は2050年までにCO2排出量を90年比で60%程度削減する必要があります。

こういう深刻な状況にあるにもかかわらず、日本の取り組みは遅々として進まず、人類の存亡にかかわるこのような重大情報が一般に知らされないこと自体が子孫への重大な背信行為ではないでしょうか。そして、これを黙認している私たち日本人全体が重篤な石油中毒患者のようでもあります。

建築は数十年先を見越して計画をしなければなら

ないのに、2010年までの計画しかない京都議定書では役に立たないではないか！どうしたらエコマークがとれるだろう？実際に省エネを達成できたのだろうか・・・。数年間、暗中模索が続きましたが、東大・福大の先生方や設備設計事務所、施工会社のご尽力で念願の建物を完成することができました。



名称：福井県教育センター  
建築物エコマーク取得  
省エネ率30%（実測値）  
CASBEE：Sクラス  
技術振興賞 受賞  
（空調・衛生工学会）  
福井市都市景観賞 受賞

酒井建築事務所 環境カウンセラー  
酒井良雄

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第28号

発行日

発行 日本建築学会北陸支部広報部会

飯野 秋成（新潟） 玉井 泰子（富山）

早見 洋平（長野） 山崎 幹泰（石川）

薬袋 奈美子（福井）

事務局 穴井 伸二・瀬口さゆり

〒920-0863 金沢市玉川町15-1

パークサイドビル3F

TEL & FAX 076-220-5566